

# 社会科でのアクティブ・ラーニング導入への課題 ディスカッションに関する一考察

徳 田 光 治  
国 府 君 江

## 1. はじめに

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会により平成28年8月に出された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では、『主体的・対話的で深い学び』の実現（『アクティブ・ラーニング』の視点）ということで、以下の四点をあげ、そのねらいも説明している。

- ①「主体的・対話的な深い学び」、すなわち「アクティブ・ラーニング」の視点からの学びをいかに実現するかが重要と考える。
- ②子供たちが、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結びつけたりすること等で、学びを深め、授業改善に向けた取組を活性化しようとする。
- ③形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善にとどまるのではなく、個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図する。
- ④「アクティブ・ラーニング」とともに「カリキュラム・マネジメント」を授業、学校の組織や経営の改善などを行うために重要なことと考える。

この①～④で求めていることは、子供たちが、「学習内容を（単に理解することだけでなく）人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し……生涯にわたって能動的に学び続けたり」する能力であり、「多様な人との対話で考えを広げたり、各教科で身に付けた資質・能力を様々な課題の解決に生かす」能力であるという。

大学教育から注目され始めたアクティブ・ラーニングの動きは、今では中学校、高等学校教育でも話題の中心である。その実践例として「アクティブ・ラーニング」

の定義もなしに、作業を課すこと・ディスカッションをさせることで、その紹介としているものもある。「主体的・対話的な深い学び」の実現・アクティブ・ラーニングの実践に関する議論の大きな流れの中で「生徒達が能動的に授業に参加する」という魅力的な語に引きずられ、その技法が協調され過ぎているのではないだろうか。「私はすべての授業をアクティブ・ラーニングで行っています」と言ってその授業例を紹介している教師もいる。私は、そのような考え方にはかなり疑問を感じる。学生時代・院生時代の研究テーマが「(大人の) ラーニング」だったので「ラーニングの重要性」「自分でわかるという経験の重要性」は十分理解しているつもりだが、単純に「作業を課す」「ディスカッションをさせる」授業展開のみでいいとミスリードするような紹介の仕方には同意しかねる。講義形式の授業を聴いていて積極的にラーニングしている生徒もいれば、課された作業をしても、ディスカッションを導入した授業展開を体験していても積極的なラーニングができていない生徒もいる。もっとマイクロにとらえなければ現場での混乱を招くだけだと考える。

調べ学習など「作業を課す」ことが、プラスに働くのは、その作業中に自分で発見したという「成功感」がある場合で、作業を課しても、それが例えば教科書を見れば誰も見つけられる語句を教員が準備したプリントに書き込むだけの作業では意味がないと思う。それで「成功感」を体験する生徒はいない。生徒が作業をしながら「自分で発見したのだという成功感」が感じられる課題であるかどうかは肝心なこととなる。少し考えてみなければわからないが、気付くことが不可能でない課題」をどのように設定していけるかが大事なことだと思う。そもそも、文部科学省が導入しようとしている「アクティブ・ラーニング」は、物事を理解するだけでなく、知識と知識、知識と現実の問題を関連付け、課題となっていることを解決していくことである。

「ディスカッションをさせる」授業展開においては、基礎となる生徒たちの知識量への考慮無しでは意味がないと思う。それなりの知識がない生徒たちにディスカッションをさせても幼稚な意見交換にしかならない。また知識量にかなりの差があるメンバー間のディスカッションも充実した展開にはならないだろう。さらに、少人数のディスカッションでも慣れていない生徒は多い。それを必修など

約40人のクラスで実施していくことから始めるのは大変だと思う。言いつばなし聞きつばなしの中で「アクティブ・ラーニング」が成立するとは思えない。

今春、短期留学付添いとして姉妹校のマクダナ校へ行き歴史や経済の授業を中心に見学をする機会を得た。各クラス20人弱で一時間の長さは100分。その中で生徒達がディスカッションをすることも取り入れられていたが、講義も織り込まれ、担当者や科目によりそれぞれの工夫がなされていた。16年前に行った時よりもクラス規模は少人数化していたし、一時間の長さも教員達の議論を経て最近変更になったと聞いた。いかにして生徒たちにラーンさせていくかの工夫に取り組んでいる文化を羨ましく感じた。また、各教室には、“Guidelines for Discussion”と題した紙（模造紙大）表1が貼られていた。これもマクダナ校の教師たちが相談して作ったと聞いた。ディスカスすることに慣れている文化のアメリカでも、生徒たちに質の高い議論をさせるために、このようなガイドラインを必要にしている。日本では、ディスカスよりも前に、自分の意見を持つこと、またそれをクラスで発言することが、容易でない生徒も結構いる。授業外では活発でも、授業となるとそれが不得手になる生徒もいる。

本稿では、「アクティブ・ラーニング」自体ではなく、その多くの議論の中で当然身に付いているかのようにされている生徒たちのディスカッション能力に注目し、アクティブ・ラーニングのために必要となるディスカッション能力を育てることの理解を深めたいと思う。

## 2. ディスカッションとは

「ディスカッション」をする、させるという時、その話し合いが本当に「ディスカッションになっているのか」ということは、通常考えないであろう。そんなことには何の疑問も感じないで使っているのではないだろうか。しかし実際に「ディスカッション」はそう容易に成立しているわけではない。「議論する」「討論する」ということでは、「ディベート」という語もよく使われる。「ディスカッション」「ディベート」「ディスピュート」似たような語だが、意味が全く異なる。「議論する」「討論する」「話し合う」等々、くつきりとした違いがない日本語と

### Guidelines for Discussion

Listen actively -- respect others when they are talking.

Assume positive intent.

Speak to what is core.

Speak from your own experience instead of generalizing (“I” instead of “they,” “we” and “you”).

Do not be afraid to respectfully challenge one another by asking questions, but refrain from personal attacks – focus on ideas.

Participate to the fullest of your ability – community growth depends on the inclusion of every individual voice.

Instead of invalidating somebody else’s story with your own spin on her or his experience, share your own story and experience.

The goal is not to agree – it is to gain a deeper understanding.

Be conscious of body language and nonverbal responses – they can be as disrespectful as words.

Be mindful of how long you speak.

Let the silence do the heavy lifting.

Lean into discomfort!

Believe in yourself, and in our community.

は大違いである。「ディベート」「ディスピュート」と異なり「ディスカッション」は議論した結果、グループの意見が一つにまとまる議論のことをいう。この意識があるとないとでは、議論の運びで違いが出る。自分の意見の主張をお互いに言い合っているだけでは意見は一致しない。出来るだけ早い時期にメンバー各人の意見の違いを見せ合い、その後は何故異なる意見になっているのかをお互いに知ろうとすること等から一致させる努力をメンバー全員がしないと実現しない。考えてみたら当たり前のことであるが、大人の会議でもこの努力が行われていない、逆に議論が進むにしたがってひとつの違いを強調する発言も結構あり、行動面からみたら「ディスカッション」と「ディベート」の違いがわかっているとは思えない行動が、よく見かけられる。結果、時間切れで決まるか、周りが諦め強引な人の意見で決まるか、役職の権限で決まるかということになる。それでも、みんなで話し合う場をもったから、意見を言いたい人には発言する機会を与えたから「ディスカッションをした」と思っている人がとても多いのではないだろうか。

自分と異なる意見を聴くことが難しいのは、誰もが「自分の意見は正しい」「自分の意見の方が正しい」と思うからである。そして、この時、相手も同じように「自分の意見が正しい」と思っていることに気付きにくい。そのため自分と異なる意見の相手に「何でそう思うの」と聞かず、自分の意見の根拠などの説明を始める人が多い。お互いにこれが始まり時間が費やされる。相手の意見への攻撃（その意見は誤りだという発言）をしても相手が意見を変えないと相手への攻撃となり、その関係性まで拗れてしまうのが「ディスピュート」という議論。意見を合わせるためにはどうしたらいいのか、という知識がないと熱心になったがために、こんなことになってしまうということもあろう。頭で理解していても行動できないことは間々あるが、議論を始める前に、グループとしての意見をまとめるためには当然、グループのメンバーは自分の意見の少なくとも一部分は修正することになる可能性があると思っているとないのとでは大違いである。アクティブ・ラーニングのねらいの一つが「多様な人との対話で考えを広げる」ことであるなら、生徒たちには、ディベートでなく、勿論ディスピュートでもなく、ディスカッションの能力を身に付けさせること、「ディスカッション」と聞いて「議論」をイメージさせるのではなく、ディベートでもなくディスピュートでもない「ディスカッ

ション」の意識を持たせることが必要だろう。

実りあるディスカッションをするためには、様々な意見を持った人たちの集まりであることが要求されよう。そこで意見をまとめていくには一人一人が自分の意見を言うことよりも、自分とは異なるひとの意見を聴くことに一生懸命にならなければ成立することではない。そのように行動できていない「自分に気付くこと」これが肝心なことになる。それができているメンバーかどうか、できていなくてもできるように努力しているかどうか、さらにそういうメンバーの多いグループかどうか、そのような文化が育っている組織かどうかの違いは、とても大きな違いであろう。

何故、自分とは異なるひとの意見を聴くことが難しいのか、聴くためにはどういう聴き方を心がけたらいいのかについて、ラッセル&ブラックに興味深い記述がある。そういう知識も生徒達に伝えられたらディスカッションの質も変わってくる。

ディスカッションをするには、まずメンバー各人が「自分の意見を持つ」ことが必要だがこれもそう容易なことではない。かなり変わってきたとはいえ日本人は総じて自分の意見を主張するのが苦手な人が多い。自分の意見がない、自分の意見を持っていても自分からは言わない、親しくないメンバーがいると言わない等、意見を述べることに抵抗がある生徒も結構いる。授業だけでなく学校生活のいろんな場面で意見を求めていくことが必要だと考える。

### 3. 自由研究講座

成城学園高等学校には、年間通常時間割のなかに『自由研究』という講座（週2時間）が設けられている。授業内容は担当者の自由裁量が認められており50年以上続いている、成城学園高等学校の特色ある講座である。表2は発足3年目、当時全学年必修としていたので、その完成年度である1969年度（昭和44年度）の講座一覧。表3は2017年度（平成29年度）の講座一覧（現在は、2、3年生の選択科目として設置）である。筆者はその中で「組織内での人間行動」に焦点をあてた講座（「組織人を考える」）を（校務分担・持ち時間の関係や、選択人数

の関係で開講できないこともあったが) 約15回開講してきた。履修者は、20名を超えたこともあったが、6、7名の時もあり通常は10人前後であった。その講座での生徒のディスカッションに関する行動の一部を報告する。一学期には、C.

表2

1969 (昭和44) 年度 講座一覧

1 年 生	
A コース (木)	B コース (火)
1. 数学演習 Ia	11. 弦 楽 I
2. " Ib	12. 英語演習 Ia
3. 国語演習 I	13. " Ib
4. 基礎数学	14. 基礎会話
5. 自然科学入門 A	15. 基礎英語 a
6. 文学入門 A	16. 基礎英語 b
7. 書道入門	17. 自然科学入門 B
8. 楽 道	18. 文学入門 B
9. 体育実技 Ia	19. 芸術入門
10. 体育実技 Ib	20. 歴史入門
	21. デザイン I

2 年 生

A コース (月)	B コース (木)
1. 数学演習 IIa	11. 声楽・合唱 II
2. " IIb	12. 英語演習 IIa
3. 国語演習 II	13. " IIb
4. 短歌入門	14. 英 作 文 II
5. 近代文学講読	15. 古文講読 II
6. 日本古代史	16. 現代評論文 II
7. 西洋史研究	17. 西洋美術史
8. 物理実験 II	18. 家庭科実習 II
9. 弦 楽 II	19. 楽 道 II
10. デザイン II	20. デザイン II

3 年 生

A コース (月)	B コース (水)
1. 数学演習 IIIa	12. 英語演習 IIIa
2. " IIIb	13. " IIIb
3. " IIIc	14. 英語上級
4. 国語演習 III	15. 古文講読 III
5. 近代時研究	16. 現代文学講読
6. 哲学入門	17. 経済学入門
7. 日本現代史	18. 数学入門
8. 物理実験 III	19. 化学実験 IIIa
9. デザイン III	20. " IIIb
10. 短 歌	21. 声 楽 III
11. 書 道 III	22. デザイン III
	23. 家庭科実習 III

高等学校「自由研究講座」要覧 (第一集) p.31

表3

2017 (H29) 年度 2 年生「自由研究講座」一覧

コード番号	講 座 名	担 当 者
1	宇宙を探る	富 塚 マリ子
2	環境副産物入門	堀 井 敏 夫
3	American TV Dramas & Role Play	Leilani 中 川
4	Enjoy English (英会話)	Marian 山 岸
5	フランス語会話	徳 山 葉 子
6	ライフモービング	鳥 田 貴 史
7	独唱・重唱2	牛 山 丈 嗣
8	弦楽2	岡 吉 崇 亮
9	ギター教室2	鈴 木 豊
10	デッサン基礎	下 橋 克 則
11	デザインとは何か	渡 部 里 実
12	ペン習字2	未 定
13	伝統工芸・日本舞踊	又 村 望 子
14	茶道	板 井 尚 英
15	Radio Broadcasting	熊 海 り 子

2017 (H29) 年度 3 年生「自由研究講座」一覧

コード番号	講 座 名	担 当 者
1	日本学入門	杉 藤 剛 幸
2	映画を観る	安 田 晴 子
3	中国語会話	市 川 幸
4	組織人を考える	田 村 登 江
5	The Photos	久 保 晶 之
6	TOEFL 対策講座	飯 島 怜
7	英米文学ワンダーランド	八 木 達 雄
8	English Speaking Skills	Leilani 中 川
9	ドイツ語会話	大 井 真 奈
10	フランス語会話	徳 山 葉 子
11	体験1 Foot Ball	藤 森 紀 昭
12	柔道 (JUDO) 黒帯を獲ろう	原 田 新 一
13	独唱・重唱3	牛 山 丈 嗣
14	弦楽3	岡 吉 崇 亮
15	ギター教室3	鈴 木 豊
16	デッサン基礎II	下 橋 克 則
17	ART Cross Over	渡 部 里 実
18	ペン習字3	未 定
19	クロスステッチ	高 野 里 美
20	和歌—自分だけのゆかたを作ろう—	高 橋 美 江
21	映像LABO.	河 合 伸 也
22	日南簿記3級講座	未 定
23	数学I・Aゼミ (受講条件あり。P.31参照)	数 学 科 教 員

『高等学校 カリキュラムの手引き』

アージリスの「精神的成長」の定義や「防衛機制」など社会心理学の基礎知識を説明し、その知識を得て新たに自分の行動や周囲のひとの行動で見えてきたことにはどんなことがあるかを各自に述べさせたりして「パーソナリティー」に関する理解を深めさせる時間を持った。二期には『12人の怒れる男』の映画を見せ、その登場人物を材料にして一学期に得た知識を深めた。1957年に制作されたこの映画は、そのほとんどが陪審室での12人の陪審員達の審議・議論の様子を扱った作品。映画としても多くの賞を獲得しているが、心理学の本でも取り上げられているほど登場人物のパーソナリティーがよく描かれている。内容としては、被告人の少年に対し当初1人を除く11人が有罪と言っていたのが、最終的には12人全員で無罪という評決を下す。その間の議論を描いたものである。

授業としては、2人目の無罪票が出てきたところで映画を一旦ストップし、「最終的には12人全員一致で無罪の評決を下すこと」を生徒に告げ、2人目から12人目までどういう順番で有罪から無罪に意見を変えていくかを各自に予想させた①。それから生徒達を5人前後の2グループに分け、ディスカッションをさせグループとしての意見を決めさせ②、グループとしての意見が出た後の各自の意見を更にきいた③。そして、①～③のそれぞれが決めた順番と実際に映画で意見を変えていく順番との偏差を計算した。数が少ない方が正解に近いこと、つまり登場人物のパーソナリティーを見抜いていたことになる。

①の作業をさせている段階では、さほどでないが、②、③と進むに従って生徒の本気度が変わってくる。同じ映画を同じように見たにもかかわらず自分が気付かなかったことに気付いている友達がいる等ということから本気になってくる。また、意見を持つのが苦手な生徒でも、順番を決めるという取組みやすいことなので、参加度に問題を感じる生徒はいなかった。

興味深い結果としては、ほとんどのグループで、グループの意見②が、①の平均よりも少ない数になること（より正解に近づいていたこと）だった。そして、そうならなかったグループの議論には何らかの問題、例えば周りが何度言っても一人で同じことを言い張るメンバーがいた等の問題があった（この傾向は、大学・大学院時代にゼミナールの教授が実施していた企業研修の場で企業の管理職相手に実施した時の傾向とも同じであった）。生徒たちも、そのことがわかってくる

ので、グループで考えることの重要性を実感するようになる。

③の数值は①の数值と比べ減少するケースが多いが、その結果は様々であり周りの意見に振り回され大幅に数值が増えてしまう場合がないわけではない。①～③の各自の数值を図にしなからフィードバックし、自分達がグループの意見を決めるときにしたディスカッションがどうだったか（どこがよくてどこが問題だったか）を振り返らせる時間を持った。「『△△の職業の人は頭が固くて融通がきかないことが多いから意見を変えるのは遅くなるはずだ』という（一般論を言っている）意見に納得してしまったのがいけなかった」「『○番の陪審員は、自分とは異なる意見に対していつも否定していたから意見を変えるのが遅いはずだ』という実際の映画の中の登場人物の行動から考えている友達の意見を聴いてすごく納得した。自分は最初に映画を見たとき、○番の陪審員がそのような行動をとっていたことに気付いていなかった」とか「自分は自分の判断を説明しようとせず、自信たっぷりに発言していた人がいたから黙ってしまってグループに貢献できなかった」とか「自分はひとを見る目がないんだとわかってショックだ。しかも自信たっぷりに発言してグループの意見を誤った方向に導いてしまった」など多くの意見が出る。この課題が複雑でないこと、意見を変える順番ということですぐに正解が見えること、当人に整理がしやすいこと、少人数なので意見の混乱も生じにくいことなどもあり、ディスカッションをすることのプラス面や、その場に臨むときの自分の行動への注意など生徒たちは様々なことを吸収する。

毎回嬉しく思っていたことは、生徒たちが自分の行動のマイナス面に自分で気付いていくことである。ひとから指摘されたのと全く異なり、マイナス面でも自分で気付けたことから嬉しそうに話をする。そして変わっていく。その後、このことよりは取り掛かりづらい課題にも、ほとんどの生徒が前向きに考えようと取り組んだ。ディスカッションすることのプラス面を実感していった。

本人達の行動に変化を求める場合、「グループディスカッションによる」意思決定と「講義や個人指導による」場合とでは、その後の行動の変化に顕著な差が出るというクルト・レヴィンの実験がある。食習慣の変更に関する実験では、教育効果はディスカッションによるものが、講義や個人指導によるよりも、二倍ないし三倍の効果をあげたという。知識を定着させるということだけではなく、そ

れに関する行動も伴わせることを考えると、ディスカッションによる授業形態は魅力的だ。新学習指導要領で公民科に新設される「公共」の授業では、特に重要になろう。しかし、生徒たちに考えさせたい現実の問題・ディスカッションさせたいテーマは、単純な答がない複雑な問題が多い。そういうテーマでディスカッションをさせることの難しさを、その出発点の意見を持たせること・発言させることの難しさも含めて、もっと検討することが必要だと思う。

#### 4. 最後に

アメリカで大統領の科学諮問委員会が出した「行動諸科学の強化ならびにその活用法の改善を急がなければならない」という進言の中で「人間の思考方法・思考過程の研究（特に自分から学びとるその方法を自分で学び取ることのやり方・考え方の研究『ラーン・ハウ・ツー・ラーン』）」が挙げられていたのは、1962年だという。

日本では、「アクティブ・ラーニング」導入を課題とされても、少人数クラス授業の実施優先度は、外国語や数学。社会科・地歴公民科の授業では、選択授業で一部少人数クラスが実現しても、学校予算上40人クラス規模の必修授業を行っている・今後も行わなくてはならない学校がまだまだ多いのではないだろうか。だとすると、この環境下で各校の工夫が必要になる。

成城学園高等学校には「特色ある教育」として上記した「自由研究」講座の他に「課外教室」という行事がある。修学旅行に変わる行事として、学年クラスを問わず年度初めに教師が立てた企画の中から生徒が選び希望者が揃えば実施するというスタイルの行事である。今は旅行色が濃いコースが多いが、その前身は「夏期セミナー」という行事で、これは「自由研究」講座発足の数年後から始まった、いわば「自由研究」講座の宿泊版である。あまり人数が集まらず、数回で企画を立てることを止めてしまったが、私は上記の自由研究講座の発展型として「課外教室」発当初数回「体験実習セミナー」という名でディスカッション能力を高めることも課題の一つに入れた、三泊のコースを数回実施した。通年とはいえ週二時間の細切れの授業とは異なり、充実度はかなりあったと思っている。

成城学園高等学校で考えれば、少人数クラスで指導要領に左右されずに実施できる「自由研究講座」で、その宿泊版の「課外教室」で、「学問への関心を持たせる」「本当のディスカッションの経験をさせる」「自分と異なる人の意見を受け入れる経験をさせる」ことは、教室でのラーニングにつながると考える。参考までに「夏

表 4 1974 (S49) 年度 夏期セミナー コース一覧	
セミナー 名	担当教師
日本史研究	樋口
古代史探訪 (日本のあけぼのをさぐる)	石崎
地理の野外調査	滝沢・徳田
文化の人類学	坂本 (卓)
現代青年の意識	鈴木
シェイクスピアの楽しい集い	大平
軽井沢「実践英語」セミナー	宮脇・パール
隠岐の島文学遺跡探訪	佐山
映画入門	若菜
夏期ワークショップ	松本
読書合宿	村井
ウニの受精及発生観察	末次・中村
絵を見る	工藤
一期一描	白岩
クライネス・コンツェルト・ヴァイオリン教室	横山・吉田
ギター教室	道城
家庭科夏期セミナー	栗田・宮崎

昭和 51 年度『「夏期セミナー」要覧』の資料より表を作成

表 5 1993 (H5) 年度 課外教室 コース一覧	
コース 名	担当教師
仏教美術の流れをたどる	志代
九州歴史とロマンの旅・Part-I	石崎・前原
佐渡歴史散歩	本間
沖縄の歴史と自然	河野 (密)・境
天文教室	富塚・増田
体験実習セミナー	国府
グルメに挑戦	服部
英語発音クリニック	岩崎
スキー教室	永島・栗村・木村・敷地 他 8 人
テニス教室	木村・栗村・横山・岩井
然別湖で自然体験	藤丸・村井・佐藤
立山黒部フィールドワーク	河野 (密)・八木
道南紀行	今野・近藤
道東紀行	坂本 (雅)・前田・綱干・河野 (健)
いろいろの生活と藤村を訪ねる	柳
写真撮影旅行	末次
ギター教室	千本
瀬戸内の歴史・文学と美術を訪ねる	坂本 (卓)
ニハオ中国	市川・永島

『自由研究・課外教室集録』第 19 号の資料より表を作成

表 6 2017 (H29) 年度 課外教室 コース一覧	
コース名	担当教師
芝居を観る	敷地
日本の文化に親しむ	高野
天文教室	富塚・小山田
ローカル列車でGO	小林 (密)・白井
然別湖で自然体験	藤
新選組 ～多摩から京へ～	八木 (道)・本吉
「成城学園『ふるさとの森』でアソブ	綱干
北陸の絶景に出会う旅	鮎川
南紀黒潮体験	楠木・小西
British Hills で英国体験	境
まだらお高原自然教室	山口・千本
瀬戸内大観の旗	石村・黒岩
沖縄 歴史と生活に触れる旅	安田
異国情緒あふれる街 長崎	高嶋
出雲 神話と妖怪のふるさと	綱干
安比スキー教室	木村・浅野・大林・島田他
京都 ～歴史と文化にふれる～	都築・堺口
泉馬天国	楳松・長谷川
Walk around MELAKA	仲川・楳松
南イタリアの世界遺産を巡る旅	中山・小西

平成 29 年度『募集プリント』から表を作成

期セミナー」初年度実施のコース一覧(3泊～4泊)と、平成5年度(1993年度)「課外教室」に変わった初年度のコース一覧、今年度のコース一覧を表にして載せておく。表4～表6。

「アクティブ・ラーニング」の授業形態を導入していくためには、生徒たちが、⑦自分の考えを持てること、⑧自分とは異なる意見があることを知ること・相手を否定するのではなく、(同意する必要はないが)受け入れられること、⑨議論をして意見をまとめられる(ディスカスする)こと等の能力が必要である。対象がどんなことであっても、ラーン・ハウ・ツー・ラーンという体験ができるのかということは大事なことだと思う。その育成をどのようにしていくか、各学校で出来るところを模索することが重要となろう。東大の中原淳氏がいうように、アクティブ・ラーニングの導入は、「授業」ではなく「学校」レベルで考えていくこと、アクティブ・ラーニングの「授業」を導入の中心として考えるのではなく、「アクティブ・ラーナー」を育てることを学校現場の取組みの中心に考えることが必要だと考える。

(文責 国府)

#### 【参考文献】

・文部科学省ホームページ

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021\\_1\\_1\\_11\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_1_11_1.pdf)

- ・河合塾編著(2013)『「深い学び」につながるアクティブ・ラーニング』東信社
- ・西川純著(2015)『高校教師のためのアクティブ・ラーニング』東洋館出版社
- ・西川純著(2015)『すぐわかる!できる!アクティブ・ラーニング』学陽書房
- ・小林昭文著(2015)『アクティブラーニング入門』産業能率大学出版部
- ・中原淳著(2016)『アクティブ・ラーナーを育てる高校』学事出版
- ・山辺恵理子・木村充・中原淳編著(2017)『ひとはもともとアクティブ・ラーナー!』北大路書房
- ・G.H.Russell & K.Black,Jr. *Human Behavior in Business* 1972.
- ・C.Argyris *Personality and Organization* 1958.
- ・K.Lewin *Field Theory in Social Science* 1951.